

「3.11 を学びに変える」

—津波被災建物の震災遺構化に関する事例研究—

長谷川研究室
01412124 馬場琢翔

1. はじめに

未曾有の津波被害をもたらした東日本大震災(3.11)から7年が経過しようとしている。3.11では東日本太平洋沿岸の広範囲に被害が及んだため、現在でも復興状況は地域によって様々である。このような状況の中、阪神大震災や中越地震のように、東日本大震災でも「震災遺構」が取り上げられるようになった。震災遺構とは、災害の記憶をとどめる目的で保存する断層や建築を指す。ここでは、最近、震災遺構に決定された津波被災建物の現地視察を行い、その背景にある遺構化の意義を探った。

2. 現地視察概要

震災遺構に決定された石巻市の大川小学校と門脇小学校、さらに遺構化が検討されている南三陸の防災対策庁舎を中心に、宮城県沿岸の石巻・女川・南三陸・気仙沼の行程で現地視察を行った(2017年9月実施)。現地視察概要をまとめて図1に示す。

まず、大川小学校では家族が犠牲となった元女川中学校教員の語り部・佐藤敏郎氏¹⁾にヒアリングすることができた。地震発生から1時間の猶予と沿岸から5km離れた内陸の地点で何故多くの犠牲者を生んだのか、この点を中心に遺構化の背景を探った。南三陸は石巻・女川に比べて復興がかなり遅れていた。津波災害の甚大さを物語っており、全国的に有名な防災対策庁舎を例に、震災遺構化の意義を探索した。最後に、3.11の常設展示館²⁾がある気仙沼の復興状況を視察し、展示館にて文献を調査した。

3. 事例にみる震災遺構化の意義

(1) 大川小学校

大川小学校の調査資料を図2にまとめた。同校では生徒74人と教職員10人が北上川を遡上した津波の犠牲となった。RC造2階建ての校舎は2階天井まで浸水した。浸水の原因は遡上にあるが、これは同校が新北上大橋の後背低地に位置する立地条件が

関係している。北上川を遡上した津波は多くの流木を巻き込み、新北上大橋で堰き止められてダム化し、その決壊によって一気に低地へ流れ込んだと言われている¹⁾。大川小学校の遺構化には、内陸でも立地条件によって甚大な津波被害が起こりうる教訓を含んでいる。しかし、地震発生から津波襲来まで約1時間の猶予がありながら、何故多くの犠牲者を生んだのであろうか? 校庭には津波避難に最適な裏山が隣接している。未だ検証されていない問題だが、大川小学校の遺構化の背景には、避難時の集団における意思決定の問題も教訓として刻まれている。

(2) 門脇小学校と南三陸防災対策庁舎

門脇小学校の調査資料を図3にまとめた。同校は唯一残る火災建物で、震災時には300人を超える生徒が被災したが、隣接した高台への避難により犠牲者を一人も出すことはなかった。津波被災時には「油」を燃料とする車や船が流出するため、火災の発生リスクが高い。門脇小学校の遺構化には、津波火災の教訓が刻まれている。つぎに、南三陸防災対策庁舎の調査資料を図4にまとめた。同庁舎は「悲劇の防災対策庁舎」と呼ばれ、職員が最後まで避難を呼びかけたことで有名である。同庁舎は津波に対するS造建物の脆弱さを教訓として残した。2つの事例から、「津波避難建物」の計画において、RC構造と耐火構造の重要性が示唆される。

4. まとめ

東日本大震災で震災遺構に決定された津波被災建物について、その遺構化の意義を現地視察に基づいて探索した。遺構化の本質的な意義を理解し、語り部などを通じて伝承していくシステムの構築が防災教育の観点から求められている。

【参考文献】

- 1) 小さな命を考える会(<http://311chiisanainochi.org/>)
- 2) リアス・アーク美術館常設展示図録: 東日本大震災の記録と津波の災害史, 2017.6



図1 現地視察概要



図2：大川小学校の3.11



図3：門脇小学校の3.11²⁾



図4：南三陸防災対策庁舎の3.11